

翻 訳

中国における社会学の回復と再建

楊 善 華 著
星 明 訳

〔訳者まえがき〕

この訳稿は、楊善華（前北京大学社会学部教授）の「社会学的恢复和重建」（社会学の回復と再建）の全訳である。この楊の論考は、張静編『中国社会学四十年－改革开放四十年與中国社会科学叢書』（商務印書館，2019）の第一章に掲載されたものである。

この楊の論考では、新中国成立後まもなくから1978年まで30年近く中国の本土で、廃止されていた社会学が1979年3月に回復され、再建されて行く政治的・社会的背景、实际的・具体的なプロセスが詳細に述べられている。したがって、新中国の建国以前に50年間にわたって存在した社会学という学問が、新中国建国後、政治的理由で禁止され、タブーにされた経験をもたない日本の社会学界に、中国本土で社会学が復活し、再建されて行くプロセスをぜひ紹介しようと思った。これが翻訳に至った経緯である。訳者にとっても、この30年余り、実際にお目にかかったり、学術交流をしたり、ご自宅を訪問したり、翻訳をしてきたなんにんかの方々のお名前がでてきて、個人的には往時を彷彿しつつ訳業を進めることができた。

最後に、訳者の翻訳と本論集への掲載のお願いを快諾してくださった楊善華教授に、厚く御礼申しあげます。

(序)

改革・開放後の中国社会学の回復と再建については、1979年3月の中国社会学研究会の創立から論ずべきことが中国社会学界の共通認識である。楊心恒先生は、『中国社会学の回復と再建について語る』（说说中国社会学恢复与重建）のなかで、「1979年3月15日から18日まで、『社会学座談会』が北京で開催され、中国のイデオロギーを主管するマルクス主義理論家胡喬木がスピーチで、『社会学が学問であることを否定し、非常に乱暴なやり方で社会学

の存在、発展、教育を禁止したのは、科学的、政治的な観点を問わず全部間違っており、社会主義の基本原則にもとる』と話した」ことに言及している⁽¹⁾。当時中国社会科学院の院長の地位にある胡喬木のこのスピーチは、1952年に廃止された社会学のために名誉回復をしたはずである⁽²⁾。中国社会学研究会が主催する『社会学通訊』の記事によれば、会議開催中、協議、討論を経て、『中国社会学研究会工作条例（草案）』を採択し、選挙で50人からなる理事会をたちあげ、会長に費孝通を、副会長に田汝康、陳道、杜任之、李正文、羅青、林耀華、雷潔瓊を選出した、また于光遠、陳瀚笙、吳文藻、吳澤霖、李景漢らを顧問に招聘して、中国社会学研究会の成立を宣言した⁽³⁾。楊心恒先生は、同じ文章のなかで続いて、「座談会が終わった二日後、すなわち3月19日の『人民日報』（海外版）が真っ先にニュースをだし、海外の社会学者、とくに中国系の社会学者は非常に喜び、互いにニュースを知らせ合って」⁽⁴⁾、中国の社会学の回復のニュースが次から次へと伝わった。

なぜ「回復と再建」というような逃げことばを使用する必要があったのかについて、楊心恒先生はかつて次のような見解を発表した。これは、第一に、当時まだ健在であった世代の社会学者のほぼ全員が旧中国を経てきており、かれらは1952年に社会学が「ブルジョア社会学」と認定され、しかも廃止された出来事を体験している。その後もかれらのなかの大部分のひとは1957年にまた社会学の回復をアピールしたことによって、また「ブルジョア右派分子」のレッテルを貼られたし、その後起こった「プロレタリア文化大革命」のなかで、さらに以前の右派分子の個人的な経歴があったためにまたも痛ましい迫害を受けた。それゆえ、1978年から1979年に改革・開放の陽春がやってきた時、かれらは依然としていまだにこころがびくびくしていた。こういった原因によって、災難後に余生を送っている社会学者は「回復」を提起する勇気がなかった。というのも、かれらは右派のレッテルははがされたが、いまだなお名誉回復がなされていないので、「復辟」を非難されることを恐れて、「再建」といわずにやらなかった。しかし、中国は1949年以前、まぎれもなく社会学という学問があり、学問分野はすでに相当な規模になっていたし、研究成果も積みあがっていた。したがって、「回復」とは歴史を断ち切ることはないし、実際に符合しないといえる。それゆえ、「回復」と「再建」のどちらか一つを選ぶのが困難な状況のもとで、もっとも確実な方法は両者を並べて提起することである、そこで「社会学の回復と再建」という表現になったのであろう⁽⁵⁾。

（「回復と再建」とした：星挿入）第二の原因は、イデオロギー面である。マルクス主義は当時の中国社会で主導的地位に立つイデオロギーであり、中国共産党内のマルクス主義理論家にとっては、弁証法的唯物論と史的唯物論は社会主義革命と社会主義建設を指導する理論指針であり、社会を認識し、社会を改造する面で、一切の理論と実践の問題を十分解決できるものであった。しかも、以前、社会学の教育および研究の任務を担っていた国内の社会学者は、ほとんど欧米の資本主義国家に留学しており、かれらが習得した社会学は理論か、研究方法かにかかわらず、すべてマルクス主義と相反している。そのために、ブルジョア階級的であることは

避けられないが、これも当時社会学が廃止され、また社会学が批判された理由である。胡喬木同志は党中央を代表し、社会学の名誉を回復したけれども、以前の社会学の状況に鑑みて、かれらは、社会学の名誉回復後の可能な発展傾向に対して、依然として疑念を抱いていると同時に、社会学を再建する任務を引き受けた学者たちは以前の「ブルジョア社会学」の道をたどることを心配している。したがって、かれらはただ「再建」を話題にしたいと思うだけで、「回復」はいいだしたくなかった。

一. 布石を固める：「五臓六腑」と開放・導入

しかし、ここまでさまざまな問題があったけれども、初期段階に回復と再建に加わった社会学者のほとんどは、欧米で相当体系的な社会学のトレーニングを受けており、1920、30年代に中国に戻ってから社会学が廃止される前まで、かれらは少なくとも10年余りの教育と研究の経験があった。かれらは学問をどのように建設し、完全なものにすべきかについても、比較的洗練された洞察と冷静な認識をもっていた。これが社会学の回復と再建のために比較的強固な学問的基礎を提供したのである。

1979年3月に、中国社会学研究会の会長に選出された費孝通教授は、自らの学者としてのキャリアを回顧した時、かれの学問的思想に大きな影響を与えたなんにんかの先生に言及した。すなわち「わたしのなんにんかの先生のなかで、第一に影響を及ぼしたのは呉文藻先生で、第二は潘光旦先生です」、「わたしがこれらの先生からえたものはなにかというと、呉文藻先生についてですが、……先生は中国で二つの重要な考えを提起しました、一つは社会学の中国化で、もう一つは社会学と人類学を結びつけたことです。人類学の方法を利用して中国の社会学を発展させましたし、フィールド調査のなかから思想を生みだし、理論をつくりだしました。潘先生がわたしに与えた比較的重要な考え方は、「二つの世界」です、一つはひととモノの関係の世界で、もう一つはひととひとの関係の世界です。わたしは潘先生の考えに基づいて、『人文世界』という概念を提唱しました」⁽⁶⁾。われわれは、中国社会学のここ数年来の発展の軌跡をとおして、学問分野の発展を導く責任をもつ第一人者のもっている学術思想とそれが社会学の発展に対して与えた影響を例証することができる。

呉沢霖教授は、1981年6月1日に、第2回社会学講習班の受講生への講座のなかで、学問の分野とその建設の問題に重点的に触れた。かれは、学問の分野は「組織化された知識」であり、この知識を「体系化、理論化」することを提案し、学問の分野のなかには「出版された書籍、組織化され学部」があり、それは「教育を行ない、宣言すること」ができる、これで学問分野になる。「学問の分野と科学は同じではない」、たとえば、宗教は「科学でないが、しかし宗教学はありえる」、学問の分野は「必ず自らの内容をもつ必要がある」し、「特定の理論、特定の方法および自らの研究対象」をもつ必要がある⁽⁷⁾。

まさにこのような基礎を踏まえて、費孝通教授は、社会学の回復と再建早々に「五臓六腑」という通俗的な格言を借用し、回復と再建のために必ず行なう必要があるいくつかのことを述べた。現在のことばでいえば、費先生のこのようなやり方は、布石を固めることである。鄭杭生教授はかつて「費孝通先生の中国社会学に対する偉大な貢献」という文章のなかで、1981年11月、ロンドンへの飛行機のなかで、費先生から「五臓六腑」の構想を拝聴したことを回想している。いわゆる「五臓」とは「人材の養成、機構の立ちあげなどの五つの項目の施策」を指し、具体的にいえば、学会、研究所、社会学部、図書資料センター、刊行物と出版社の立ちあげを指す。いわゆる「六腑」とは「大学の社会学科が六つの基本的な課程、すなわち社会学概論、社会調査研究方法、社会心理学、都市社会学、比較社会学および国外社会学理論」を開設することを指す。鄭杭生教授は「その後、中国社会学の回復と再建の道筋は、基本的にこのようにたどってきた」と考えている⁽⁸⁾。

学会の設立以外に⁽⁹⁾、学術研究の推進、人材の養成についていえば、もっとも重要な担い手は社会学研究所と大学の社会学部のほかにない。1980年1月、国務院の批准を経て、中国社会科学院社会学研究所が正式に成立し、費孝通が所長に、王康が副所長に任命され、陳道（当時、中国社会科学院科研計画局局長）が社会学研究所党支部書記を担当した。研究所には、社会理論、婚姻・家族および都市・農村社会の三つの研究組織が設けられた。

1980年4月、上海復旦大学分校（現在の上海大学）は、もとの政治教育学部の基礎のうえに社会学部を設立し、袁輯輝教授が学部長を担当した。これと同時に、南開大学、中山大学および北京大学の関係する教師と機関は、費孝通教授と雷潔瓊教授の支持と援助のもとに、社会学部を設立する計画をスタートさせた。蘇駝教授の回想によれば、費先生は、5大要件（五臓）のなか極めて重要かつもっとも緊急性の高いのは、やはり専門的な人材を養成することだと考えていた。1980年に費先生は南開大学にきて、学校の指導者や関係者が出席した会議で、南開大学が社会学科を設立し、社会学の人材を養成できることを希望した。当時の哲学部学部長の蘇駝教授は関係する指導者と協議し、文科の各学部3年間の期限を満了した学生のなかからなんにんかを選抜し、社会学の専門教育を行なうことを決定した。この考え方は、費孝通教授および当時の南開大学副学長の滕維藻教授によって強く支持されたし、また教育省と中国社会科学院にも強く支持されて、最終的に、この考えは高教（一）第104号文件になった。つまり教育部と中国社会科学院が共同して、南開大学に社会学の専門班の開設を委託するという決定になった⁽¹⁰⁾。これが社会学界で黄埔一期（之一）⁽¹¹⁾と称される南開班の由来である⁽¹²⁾。

広州にある中山大学は香港に近く、費孝通先生は往時燕京大学社会学部の同級生で、中国系アメリカ国籍の社会学者楊慶堃教授の強力な支持があったので、社会学の教師の面で、香港中文大学の社会学部の一部の力を借りることができるようになり、それによって1981年に何肇發教授を学部長として社会学部が成立した。この学部は、教育部所属の重点大学なかで最初の

社会学部を設置した大学になった。

雷潔瓊教授の生前の追憶によれば⁽¹³⁾、北京大学社会学部の設立は、かのじよと費孝通教授とがいっしょに北京大学の当時の党委員会書記であった韓天石同志と面談し、韓天石氏の強い支持をえられた結果であるという。さまざまなことを考慮して、大学はまず先に社会学専攻を設置し、社会学講座を設け、条件が整えばさらに社会学部を設立することを決定した。1980年8月19日、北京大学は教育部に書簡を送り、承認をえて、社会学専攻を国際政治学部のなかにひとまず設置した⁽¹⁴⁾。北京大学社会学部は再建の仕事中に、教師を養成することが大きな問題となり、全国の社会学の再建活動と互いに連携して、主に三つの方法をとった。すなわち、一つ目は前に述べた社会学講習班である。各大学や研究機関から働き盛りの教員と研究者を選びだして訓練し育成訓練した。北京大学では夏学鑾が参加の命を受けた。二つ目は5名の北京大学の学生を南開に派遣し、南開大学が引き受けている社会学講習班に参加させた。三つ目は学生を外国に留学させることであり、顧宝昌がアメリカに派遣された。1981年末までに、北京大学社会学専攻は13人の教師を招集して、社会学部を設置する条件はすでに整った。1982年4月、学長業務連絡会議で討論し、正式に北京大学社会学部を設置することを決定し、袁方教授が学部長に任ぜられた⁽¹⁵⁾。

このように、1982年末までにすでに4大学が社会学部を設立したし、地方の中国社会科学院でも多くの社会学研究所が設置されたし、あるいは設置が準備されている。「五臓」のなかの機構問題は初歩的に解決した。いうまでもなく、社会学研究所および教育機関の設立の問題を解決しながら、費孝通教授は専門人材の養成という核心問題をしっかりと把握していた。具体的な方法は、南開大学が引き受けている社会学講習班以外に、さらに北京で中国社会科学院社会学研究所が主催する2回の社会学講習班の開催である（この2回の講習班は黄浦第I期と第II期と呼ばれている）。

この2回の講習班を実際に手配した一人で、当時の中国社会科学院社会学研究所の副所長の王康教授は「社会学の人材養成」という文章のなかで、2回の講習班の状況を回顧した。王康先生は「人材の養成には、教師、教材が必要であり、また必要な教育条件が必要である。社会学は再建中であり、まさしくこれらが足りない」と指摘した。しかし、「時間が迫っている」ので、「これらの特殊な学問の特殊な状況に基づいて、新しい道を切り開くしかない」。要するに、講習班は「一種の特殊な速成の教育方式」である⁽¹⁶⁾。

ハルビン中国社会科学院社会学研究所から参加した李徳濱受講生は、第1回講習班の特徴を一流の先生+集中コース+反復学習方法と概括している。いわゆる「一流の先生」とは、すなわち当時健在の一世代うえの社会学者の呉文藻、呉澤霖、楊堃、費孝通、雷潔瓊、王康、張之毅、袁方および著名な学者の于光遠、杜任之、戴世光、張芝聯、李友義、汪子嵩、呉昊らが招聘され、特定テーマの講座を行なった。また、「集中コース」とは、つまり「講義時間を集中し、問題の要点をつかみ、本質を講じる」ことである。「反復学習方法」に至っては、「教室で

は雨あられのような詰め込みを第一として、知識の消化と吸収は講習班後に、自分でゆっくりと反復咀嚼する」ことを指す。講習班は集中授業であり、課程ごとの時間が限られているので、「毎日、午前も午後も、詰め込み教育である」、さらには「中国の学者の講義が夜間に設けられることさえあった」⁽¹⁷⁾。

割り振りによって、講習班の課程は「二つの主要なセクションで構成されており」、一つは「中国社会学と関連分野」であり、この課程は中国の国内の学者が担当した。もう一つは、「現代社会学の概念と方法」である⁽¹⁸⁾。当時中国本土で社会学という学問はすでに廃止されて28年が経っていたので、当時の社会学の教育と研究に携わっていた社会学者は少なくとも古稀の齢に達していたし、かつ専門を離れて長い年月が経っていた。したがって、「現代社会学の概念と方法」は差し迫って「導入」が必要なセクションであり、また社会学の門に新しく入る学者がもっとも学習が必要なセクションでもある。この時、費孝通教授の往時の燕京大学の古い同窓で昔ながらの友人である米国のピッツバーグ大学社会学部の楊慶堃教授は、費先生が助けを求めたとき、いささかもためらうことなく手をさしのべた。

中国本土では1952年に社会学が廃止されたが、これは生涯、社会学を志した楊慶堃先生にとって痛恨の極みであった。しかし、かれは社会学が中国で絶対に回復する日があることを堅く信じた。

香港中文大学社会学部教授李沛良の回顧によれば、当時ピッツバーグ大学社会学部の楊慶堃教授が学外試験委員の身分で香港中文大学社会学部を訪問した。当時、かれはすでにピッツバーグ大学社会学部長の Jiri Nehnevajsa 教授に、香港から青年1名を選んでピッツバーグ大学の社会学博士課程で研修させ、かつ経済的援助を与えることの同意をえていた。李沛良先生が最終的に幸運に候補者になった。李沛良が選ばれたことを後に知った楊先生はねんごろに李沛良に向かって、次のようにいった。中国の社会学はすでに廃止されたけれども、しかしついに再建のチャンスがきた。楊は香港を拠点にして、国家の近代化のためにあらん限りの力を尽くし、将来の中国社会学の再建のために種をまくことを考えた。李沛良にまさにその「最初の種子である、必ずや努力しなければならない、失敗は許されない」⁽¹⁹⁾といった。李沛良の後も、香港中文大学社会学部は劉創楚らをピッツバーグ大学に行かせてさらに深く研究させた。現在、これらの学者はみんな重宝されている。

中国社会学研究会の設立後間もなく、1979年3月30日に、中国共産党中央委員会が召集した理論工作研究討論会で、鄧小平が「四つの基本原則を堅持する」という演説を行ない、「政治学、法学、社会学および世界政治の研究を、われわれは過去長年ないがしろにしてきた。これからは、あらためて急いでやり直しをする必要がある」⁽²⁰⁾と言及した。これは社会学の学習、研究および海外交流のために、さらに大きく扉を開いた。この背景のもとで、1979年12月、中米学術交流協定に基づいて、ピッツバーグ大学社会学代表団一行4人が中国を訪問し、かつ姚依林副首相の接見を受けた。楊慶堃教授はその一人である。このように楊先生は費孝通

と協力して中国社会学を再建するチャンスを与えた。当時、楊先生が承諾したのは、課程を担当する外国や省外の教師を招請すること、かつまた外国および香港地区からくる教師の航空券および渡航生活費用（講習班が必要とする外貨の調達を含む）を支払うことであった⁽²¹⁾。かれは、嶺南基金会の援助を申請して、これらの問題を解決した。

1980年5月25日、第1回の講習班がはじまった。全国12の省市の大学、科学研究機関および政府部門からやってきた40名の受講生が西直門の国務院第1宿泊所で、2か月余りを期間とする学習に参加した。ピッツバーグ大学社会学部教授楊慶堃の同僚 **Burkart Holzner** と **Jiri Nehnevajsa** の二人の教授が「社会学と近代化」の課程を受けもち、香港中文大学社会学部李沛良教授が「社会調査と統計分析」を担当、香港中文大学劉創楚教授が「社会学概論」の課程を担当した。「社会学特定テーマ研究」の課程は、講座形式で、主催側の中国社会科学院社会学研究所が招請した国内の学者が講義した。受講生たちは、社会学の「掃盲」（非識字者をなくす）段階にあったけれども、いままでどおり酷暑をものともせず、大いに高揚して積極的に学習に打ちこんだ。明らかに、講習班が終わるころには、社会学の種子がすでに受講生の心のなかに蒔かれた。

主催側は、鉄は熱いうちに打てということで、楊慶堃教授の強い支持のもとで、1981年に同じ期間で、北京日壇全国労働組合招待所で第2回の講習班を開いた。この回はアメリカの3大学からきた5人の教授が「社会問題研究」、「社会研究方法」、「社会心理学」、「コミュニティ分析」および「応用人類学と教育の社会文化的観点」の五つの課程を、そして香港からきた5人の学者が「サンプリング調査とデータ分析」、「人口統計学」、「集合行動分析」および「都市社会と都市社会学」の四つの課程を設けた。この回は受講生も第1回講習班を上回り、51人に達し、聴講を登録した35人を加えて、合計86人になった⁽²²⁾。教室には人材が一堂に集まり、空席がなかった。これらの受講生はもとへ戻って以後、ほとんどがもとの所属先で社会学教育と研究の中堅になった。これをもって、費孝通教授が社会学の人材を短期養成するという構想の大部分が実現した。

それから、別の部分はもちろん南開大学の社会学専攻班である。この班の教育もまた開放と導入によって完成したのである。天津中国社会科学院元院長の王輝教授の回顧によれば、この班の二つの主要な課目は、「社会学理論（社会学説史）」と「社会学方法」であり、二人のアメリカの一流の社会学者が招聘された。かれらはコロンビア大学社会学部教授の **P. M. ブラウ** と著名な中国系アメリカ人教授の林南である⁽²³⁾。かれら以外にも、その他の4人の外国籍の教授がいた⁽²⁴⁾。一人目はアメリカのワシントン・カトリック大学の中国系アメリカ人教授李哲夫で、「社会統計学」を講義した。二人目はドイツのビーレフェルト大学の **Klaus-Dieter Bock** 教授で、「欧米社会学の学派」を講義した。三人目はドイツのベルリン自由大学の社会学副教授賀碧力で、「コミュニティ分析」を講義した。四人目はニューヨーク市立大学人類学教授 **Burton Pasternak** であり、「人類学」を講義した⁽²⁵⁾。

教育部の批准を経て、この専攻班は北京大学、中国人民大学、北京師範大学、復旦大学、復旦大学分校、武漢大学、華中工学院、雲南大学、蘭州大学、山東大学、中山大学、四川大学、南京大学、厦門大学、東中国師範大学、吉林師範大学、湘潭大学および南開大学の18の大学から選抜した43名を1977年入学の本科生の受講生とした。かれらは哲学、経済学、中国文学、英語、歴史および政治教育学などの専攻からきていた。その他に、聴講生11人を募集した、かれらの多くは在職者である⁽²⁶⁾。これらの受講生は卒業後、国内にとどまり、中国本土の社会学界の中堅としていち早く成長した。

専門的な人材を積極的に養成すると同時に、費孝通教授は、学科建設の重要な部分として教材の編集と出版も忘れなかった。学問の蓄積が豊かな老教授として、かれは「六腑」のもっとも基本的で、もっとも重要な課程が「社会学概論」にはかならないことをよく知っていた。楊心恒教授の回想によれば、第1回の講習班がもうすぐ終わろうとしていたとき、「費先生は大学からきた受講生を集めて座談した。費先生に、私たちは社会学に対して初歩的に触れただけで、知識は非常に少なく、班を終えて帰っても講義をすることは困難であるから、講習班の修了後、ある程度の時間を集中して、一冊の教材を共同で編集することができないかと伝えた。費先生は教育部に提案すると答えた」⁽²⁷⁾。その後、教育部は費孝通教授の提案を受け入れ、かれに『社会学概論』（試用版）の編集を依頼した。1984年の天津市人民出版社から発行された『社会学概論』（試用版）の序文で、費先生は自らこのようにいった。すなわち、「わたしは及ばずながらこの仕事を引き受けた。解放前、わたしはいくつかの大学で社会学の課程を教えたけれども、わたしの個人的な関心は社会調査にあり、大学で講義した大部分はわたしの調査資料を利用できる特定テーマの課程であり、社会学の領域全体に対しては、系統的な全面研究が欠けている」、「わたしはこの『社会学概論』の編纂グループを主宰し、指導するように求められたが、実際は力が及ばない」、「しかし、わたしにも明らかなことは、社会学の中断は忍び難く、各大学は遅かれ早かれ社会学部を開設するだろうし、社会学部の最初の必修科目は必然的に『社会学概論』になるであろう」、「これは社会学科を回復するために越えるべき最初のハードルである」、「これは自分の得意でない分野であることは承知しているし、現在客観的には読者を満足させる教材を編集する十分な条件がまだ不足していることも承知している、これは功績がみられず、責めを招く自業自得であることも承知しても、わたしは躊躇した後に、これらの任務を引き受けた、新しい中国の社会学を築くために微力を尽くそうと思った」⁽²⁸⁾と。

任務を引き継いだ後、南開大学の楊心恒、中山大学の丘士傑、復旦大学の劉豪興、上海大学の潘関宝、北京大学の夏学鑾、中国人民大学の賈春増、武漢大学の周運清および新疆社会科学院の何炳濟らの8名からなる編集グループが組織された。

北京大学の夏学鑾教授の回想によれば、編集グループの仕事は北京大学の大きな支持をえた。大学は編集グループを国際政治学部独立した研究室として置き、またこのグループのために宿舎を手配し、このグループの北京大学での生活と仕事に便宜をはかった。北京大学図書

館はこのグループに向けて所蔵する社会学関連の中文、英文の資料を開放し、グループが「『社会学概論』の編集の枠組みを思考、討論および決定するために十分な理論的資料を提供した」⁽²⁹⁾。このような条件のもとで、このグループは北京大学で3か月仕事をし、全書の概要を書きあげた。同時に各自に割り当てられた章節の概要も書きあげた。費孝通教授とその他のなんにんかの年配の社会学者の具体的な指導のもとで、『社会学概論』(試用版)はなんども集団の討論や改訂を経て、ようやく1983年夏期休暇に、費孝通教授が原稿に手をいれて最終的なものにして、天津人民出版社から出版された。したがって、われわれは『社会学概論』(試行本)を中国社会学の回復と再建の初期における中国社会学界の共同努力の成果とみることができし、また中国社会学界の開放、導入の成果でもある。

いうまでもなく、費孝通教授のような社会学の第一人者はこの本の学術的価値についてもはっきりと認識しており、「試行本の現在のレベルは、当面の草創期の実際の状況を必然的に反映している。『はじめがあれば、のちはよし』(先有后好)の精神に基づき、スタートポイントは低いことを恐れず、ただ発展が遅いことを恐れよ。数年が経って、レベルが比較的高い教材があらわれれば、はじめてわれわれの社会学の進歩が明らかになるだろう」⁽³⁰⁾。

二. 「新中国の社会学を創立しよう」

費孝通教授の1981年5月25日の第2回社会学講習班の始業式のスピーチの題目は「積極的に新中国の社会学を創立しよう」であった。社会学の回復と再建のほぼ2年後、当時の国内外の社会情勢に直面し、中国の社会学はどのように自らの特色をつくり、どのように新たな道を進むか、これはかれが考えた問題である。前述したように、1979年に社会学が回復と再建したばかりの時、年配の社会学者たちの心はいまだにびくびくし、共産党内のマルクス主義理論家も内心懸念をもっていた状態と比べると、現在、社会学は学問として、回復と再建の勢いはすでに阻止することができないようである。そのうえ、外国の社会学界の同人(とくに、中国系の社会学者)の中国の社会学の回復に対して支持と援助、ならびに連携と交流を強めたという願いも費先生を代表とする年配の社会学者たちを大いに鼓舞させた。学問の再建は必ずそれ自らの生存空間を確立しなければならない。したがって費孝通教授の当時の構想は、社会学は一つの学問として、独自の特定の理論、特定の方法および特定の研究対象が必要であるなら、それでは、マルクス主義の一部分としての史的唯物論は、社会学に対していえば指導的役割をもち、社会学の代替的役割をするべきではない、すなわち史的唯物論は社会学と同じではない。

費先生は、たびたび呉文藻教授が当時携わっていた仕事に話し及んだ。費先生は1995年北京大学社会学人類学研究所成立10周年記念会で「学問の気風をつくり、人材を育てる」⁽³¹⁾と題したスピーチで再びこの点に言及した。費先生は「口で言うより手本を示すことが重要であ

る」と述べた。呉文藻先生が孜孜として求めたことは「かれ自身が文壇で、その時代の名高い学者として首席に君臨することではない」、「かれが着目したことは、学問それ自体であり、かれが携わった社会学という学問の境遇、地位および引き受ける役割をみた」。「かれが65年前に提起した『社会学の中国化』は、当時社会学を改革する主張である」、というのも呉文藻先生は、当時の大学での社会学は「はじめのうちは、外国人によって、外国の文献を使って紹介され、多くは外国語の資料を使って例証され、続いて中国人によって外国の文献を使って講義された」、それゆえ「依然として、一種の形を変えた輸入品を脱していない」。ゆえに、呉先生は「はっきりと中国の元来の社会学は徹底した改革が必要であること、新しい気風を打ちたてる必要がある。しかし、学術の雰囲気改革と創造を実行することは、絶対に一個人ではなしえないし、一世代のひとによってさえもなしえないことにはっきりと気づいた」。というのも、「学術は学者が教えられて学んだもの、切り開いたものが認められなければならない、学者は基礎学力と学術実践を強化することから成長しなければならない」からである⁽³²⁾。したがって、「社会学の中国化」は決して口先の叫びだけではなく、必ず実践しなければならない。自らの努力に加えて、みんなを動員して一緒にやらなければならない。

筆者が考えるには、これは費孝通教授がその年（1981年）に「新しい中国の社会学の創立」を提出した学問的背景である。当然、いま思えば、費先生が「新しい中国の社会学の創立」を提出したのは、上述したように、社会学を中国化して、西洋の社会学理論を丸ごとのみにすることに反対するという含意をもっていた。したがって、社会学界はマルクス＝レーニン主義の普遍的な真理と中国革命の具体的な実践を結びつける方法を学習しているので、「ブルジョア社会学」の古い道を歩むことではないことを暗黙に裏付けた。ここから共産党内のマルクス主義理論家のさまざまな懸念に答えた。これはその年の政治の環境からみれば、政治戦術からも成功であった。

それでは、「新しい中国の社会学」とはなにか？ 費孝通教授は「新しい中国」は二重の意味を含んでいると考えている。一つは中国のもので、もう一つは新しいもの、つまり、社会主義であることである。「早期の社会科学は西洋を中心としており、西洋社会によってだされた結論が世界各地にまで普遍的に運用でき、一致する側面を強調し、標準的な西洋化を行なうことができる」と考えた。現在、西洋の社会学者もこのようなことは通じないことを認めており、各国、各民族がそれぞれ自らの特徴をもっていることを認めている、「マルクス主義も社会の共通性に注目する一方、その特殊性にも目を注ぐことを重視する。とりわけ両者の関係に注目する」、「一つの社会の特殊性をみななければならない、異なった社会の具体的な歴史的条件を理解しなければならない。われわれはその歴史的条件から離れることができないし、かつてに字面だけから意味を察して概念を抽出ことはできない」、当然「われわれは個別性、特殊性の後ろには共通性があり、法則性があることを認めている。しかし具体的な個別性をもつ事物の研究をとおしてこそ、はじめて一般的な概念を理解できる」⁽³³⁾。このように、費孝通教授はマル

クス主義の弁証法のなかで、自ら「新しい中国の社会学」を創立するために、理論的根拠を探しあてた。

いかに創立するについては、費先生が呉文藻先生の自分に与えた影響を回想した文章のなかで話したように、はじめに「ひとが必要である」、「これが目前の大問題である」⁽³⁴⁾といった。費先生は当時、この問題の緊迫性を身にしみ感じていた。これはまた、なぜかれが2回講習班を開くことを固く支持したことの原因でもある。2回の講習班を終えて、学問分野の回復の布石が基本的に完成した後に、費孝通教授は「それを実践し、全員の力を動かして一緒に努力する」ことを緊急に必要なタスクとして進めるようになった。

1945年に西南連合大学社会学部で学び、1980年に中国社会科学院社会学研究所に入った張仙橋研究員の回想によれば、講習班が終了してから、かれは北京市の宣武区と連絡を取り、そこで住民居住区を探し、社会調査の基地を建設したいと考えた。費先生はこのことを耳にして、喜んで支持を示し、自ら宣武区共産党委員会書記と話し合った。最終的に、椿樹街道東河沿居民委員会が調査基地として選ばれ、そして張仙橋、薛寅、潘崇麟および王容芬が東河沿に常駐し、社会調査を行なうことが承認された。費先生はまたたびたびこの4名を引率して、東河沿で家族の訪問調査を行ない、調査の模範を示した⁽³⁵⁾。潘崇麟研究員は『わたしと社会統計学』のなかで、費孝通教授はニューヨーク市立大学の人類学教授の B. Pasternak が、天津の二つの居民委員会で市民の家族と婚姻に関するアンケート調査を行なったことを聞き、外国の先進的な方法を参考にして、国内の研究者のデータ処理のレベルを上げるために、このアンケート調査を東河沿居民委員会でも実施できると考えたことを述べている。費先生は潘崇麟らを華中工学院（現在の華中科技大学）の自動制御学部の関連技術スタッフに紹介し、協力して、かれらのコンピュータを用いて、調査からえられたデータを処理した。これは中国社会学界でもっとも早くコンピュータを用いた、データの統計分析である⁽³⁶⁾。同時にまた、この調査は国家の「第六期五年計画」の哲学・社会科学計画の重点項目に入った「五都市家庭研究」の先駆けになった。

これとほぼ同時に、費孝通教授は1981年12月に「四度目の江村訪問」を実施する予定であった。1981年10月にかれが姉の費達生と共に行った三度目の江村訪問とは異なり、今回、かれはより多くの青壮年の学者が参加することを望んだ。というのも、このようなフィールド調査の機会は駆けだして、まだ社会学の門をたたいていない、また社会学の研究に従事するつもりである学者（学生）にとっても、得難いものだからである。

最終的には、中国社会科学院社会学研究所、復旦大学分校（現在の上海大学）社会学部、南京大学哲学部、江蘇社会科学院の社会学研究所、哲学研究所、情報研究所および経済研究所、南京師範学院政治教育学部、江蘇省党委員会学校、南開大学哲学部、復旦大学、上海社会科学院社会学研究所などの計17人（そのなかの大多数は若い学生あるいは学者である）が、1か月を期間とするこの調査に参加した。費先生の考えからすると、この調査はかれの45年前の

江村での調査のフォローアップをしなければならず、かれは非常に詳細な調査項目を口授した。調査期間は1949年前後の各時期（抗戦前後、解放戦争、土地改良、合作化、人民公社の時期）にまで及び、調査内容は人口と出産、土地制度、経済（農業と工業の副業）、家族・婚姻、社会風俗などが含まれている⁽³⁷⁾。したがって、「四度の江村訪問」の課題チームがリストした調査項目は、人口、土地、教育、家族・婚姻、幹部、農業、家計、工業の副業、商業などに及んだ。しかし、社会調査と農村活動の経験不足によって、課題チームのメンバーは尋ねるべきと思う多くの質問を考えただけでも、実施時にはあまり役に立たないことがわかった。しかし、かれらはことのほかこの調査のなかで農村と農民を理解した。筆者は、「大鍋飯」のもとで、以前は人口が多くて物産が豊かであった蘇南の農村の貧困と困窮に深く感銘を受けて、かつて、調査責任者の潘関宝先生と個人的に、30余年来のわが国の農村政策の成果はさほどないと議論をしたことを覚えている。これはまさに、費先生の「人びとを豊かにするという決心」と「農民にお腹いっぱい食べさせる」という主張の現実の緊急性を反映している。

1981年12月17日の調査開始の当日、「四度目の江村訪問」課題チームのメンバーは吳江県（現在の蘇州市吳江区）盛沢鎮の絹織物工業を実地調査した。盛沢絹織物工業は課題チームのメンバーに深い印象を与えた。いまからみれば、これは費先生が蘇南の小城鎮の経済発展から切り込み、中国の農村を豊かにする道を探求するためのはじまりであるはずだった⁽³⁸⁾。これはまた、費先生が主張する社会学本土化（中国化）のコミュニティ調査の社会学回復・再建後の最初の実践である。

社会学は「学んで実際に役立てる」ことでなければならない、これは費孝通教授、雷潔瓊教授およびその他の一世代上の社会学者の一致した考え方である。費先生の「学んで実際に役立てる」ことの具体的な表現は、社会学を中国社会の実際と相互に結びつけて、中国の農村と農民のために豊かになる道を探求することである。また、蘇南の小城鎮がかれに与えた啓発は、蘇南の郷鎮工業の発展は農村の剰余労働力の「離土不離郷」（農業から非農業へ移動するが、農村からは離れない）式の転業を解決できることである。それによって、小城鎮の発展によって中国の農村の都市化の問題を解決し、より多くの農村労働者が城鎮工業化によって富をつくる道を歩む。かれのこの考え方は当時の共産党中央の指導幹部に重視された。これと同時に、天津と北京からはじまった都市住民の家族調査も「五城市家庭研究」（5都市家族研究）のテーマに進展変化した。上記の二つの課題と袁方教授が主宰する「中国人口問題研究」は、1983年4月に成都で開催された全国社会学「第6次5か年計画」会議で重点項目として確定されて、費孝通教授、雷潔瓊教授および袁方教授がそれぞれこの三つの重点項目の学術指導者になった。中国の社会学は成果を生み出す時がやってきたのである。

三. 「社会学の再建はまた一つの段階に入った」

1986年3月26日、「光明日報」は、費孝通教授「社会学の再建のまた一つの段階」という記事を掲載した。この記事のなかで、かれは「1979年の社会学の再建以来、すでに6年がたった。目下、初期建設の第1段階が終わり、わが国の社会学は第2段階に入りはじめた。イメージでいえば、舞台はすでに組み立てられ、芝居の一座はいちおう揃ったので、いまは役者たちがうまく演じなければならない」。いわゆる、「うまく演ずる」とは、学科の建設が予定した水準に達する必要があることを指し、これは費孝通教授がいう「はじめがあれば、のちはよし」という意味である、すなわち理論、方法の面でいずれも、探索に基づいて新しいものをつくりださなければならないということである。この時期、社会学の専門的な学術雑誌の重要性が極めて明らかになりはじめた。

中国本土の社会学の回復と再建の後、もっとも早く発行されたのは上海の『社会（社会学叢刊）』である。この雑誌は、1981年10月の創刊で、復旦大学分校社会学部の管轄によるものであり、隔月刊であった。当時の社会学研究全体のレベルに制約されて、掲載された比較的多くのは調査報告、雑多な評論などであった。当時、社会学研究面での規準はまだ国内の学術界でつくられていなかったため、したがって発表された文章は研究規準の面で現在の要求と比べると、なお相当大きな隔りがある。

中国社会科学院社会学研究所が出版した『社会学研究』雑誌、その前身は中国社会学会と社会学研究所が共同で行なった内部刊行物『社会調査與研究』（1981年から1984年までの雑誌名は『社会学通訊』である）が、本刊、増刊およびリーフレット刊の三つの形式で不定期に出版され、1985年12月までに計8回と別に2回のリーフレットがだされた。刊行物のレベルも草創段階の研究レベルに相応していた。1986年1月、『社会調査與研究』は『社会学研究』に改名されて、正式に出版され、公開された。これは極めて重要なできごとであった。その意義は、全国の社会学研究に携わる研究者や大学の教師に、国内外の研究動向を理解し、学術交流を実現する舞台を提供したことであった。

『中国社会科学院社会学研究所誌（1980-2007）』は、この時期の歴史を記録した際、この時期はちょうど中国社会学の発展の補習段階であり、中国社会の実際から出発し、社会学の理論、歴史、方法および応用などの各方面の研究の推進を特徴にし、西洋、とりわけアメリカの社会学理論と方法の導入、紹介に重点を置いていたし、かつまた現代の中国社会の現状についての多くの調査報告を掲載したことを伝えている⁽³⁹⁾。筆者も、またこの段階では、「アメリカが現代の社会学の世界のリーダーである」⁽⁴⁰⁾ので、理論と方法の面で中国の社会学界にもっとも大きな影響を与えたのは当然アメリカの社会学であると考えている。

1989年、鄧方は「中米社会学の10年の交流の中国の社会学に対する影響」⁽⁴¹⁾のなかで、回

復・再建後の中国本土の社会学に対するアメリカ社会学の影響を回顧した。鄧方は、この影響はまずはじめに中国とアメリカの社会学者の間の相互訪問に具体的にあらわれていると考えている。「不完全な統計であるが、最近2年間で、中国社会科学院社会学研究所は合計26人の外国人社会学者を接待したが、そのうちの半数は米国からであった。訪中した米国代表団のなかで規模がもっとも大きなものは1984年2月、アメリカ国家アカデミーによって組織された10人の著名な学者を含むアメリカの社会学および人類学の代表団である」、「著名な中国の社会学者費孝通、王康、袁方、何肇発、蘇駝らも相次いで米国を訪問した」。当時、大学の社会学部は課程を開設していたが、課程を担当できる資格をもつ教師はいなかったため、各学部で責任を負う先輩の社会学者が、自分たちの関係をとおして、アメリカの社会学者を自分の学部へ招いて、講義を願った。たとえば、北京大学社会学部の袁方教授はアメリカのアイオワ大学社会学部教授の克蘭と張奚之を「社会調査研究法」、ニューヨーク州立大学オールバニー分校社会学部の林南教授を「社会構造とネットワーク」の講義に招聘した⁽⁴²⁾。別の面では、外国の教材の翻訳や導入の仕事を強めた。当時、「多くの大学の社会学部はまだアメリカの社会統計学の専門家のH. M. Blalockの『社会統計学』とH. Baileyの『社会研究方法』を教材としていた」⁽⁴³⁾。中国の社会学界についていえば、20世紀の80年代はアメリカの社会学が理論、方法、教材の面で比較すればもっとも多く導入された時代であったといえる。そのなかで、1983年に中国社会科学院社会学研究所が発刊した『国外社会学』⁽⁴⁴⁾は、アメリカの社会学理論と実証研究の最新の結果を紹介、導入して、重要な役割を果たした。

もしわれわれがいま当時の導入と紹介を改めて回顧すれば、アメリカのシカゴ学派と社会学のコロンビア学派の影響が間違いなくもっとも重要であったことに気づくであろう。シカゴ学派は、いってみれば、それに中国社会学に対して歴史的根源をもっている。20世紀の20年代初頭、シカゴ学派の代表的なR. E. パークが、呉文藻教授の招聘で燕京大学社会学部を訪問した。呉文藻教授はシカゴ学派のコミュニティ研究の方法を高く称賛した。19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカは農村社会から都市社会への変動を経験している。当時のシカゴ市は、この変革の主要な特徴を余すところなくあらわしていた。そのため、シカゴ学派は都市社会の問題を研究の重点としており、その研究方法はコミュニティ調査、参与観察および定性分析などである。アメリカが農村社会から都市社会へ移り変わった後は、シカゴ学派も徐々に衰退した⁽⁴⁵⁾。

コロンビア学派は20世紀の40年代にはじまり、その研究の重点はもはや都市社会の問題ではなく、個人の行為の問題である。20世紀の40年代に、農村社会が都市社会へと転換した後、続いてアメリカ社会はまた別の変動を経験している。これは社会構造が地方での相互影響から全国的な相互影響へと転換したことであり、全国市場の出現がこの転換の主要な特徴である。そのため、コロンビア学派の研究の重点は個人の行為の問題に向かい、研究方法もそれとともに変わって、サンプル調査、アンケート調査および統計定量分析などに変わった⁽⁴⁶⁾。鄧方は、

コロンビア学派の主要な指導者の一人である P. F. ラザースフェルド (1901-1976) は数学博士であり、後に社会学に興味をもって社会学に転向した、したがってかれは統計および定量分析にたけていると考えた⁽⁴⁷⁾。

しかし、筆者はコロンビア学派のもう一人の重要な代表人物は R. K. マートンであり、かれの中範囲理論は統計分析と定量研究のために理論的根拠を提供したと考えている。マートンが中範囲理論を提出したのは、第一にパーソンズの構造=機能主義に対するかれの再認識に基づくものである。マートンは、パーソンズの理論は實際上ただ一種の哲学体系とみなしうるだけで、社会学理論ではないと考えた。マートンは、社会学はすべての社会的行為、組織および変動を解釈することができるマクロ理論を樹立しようとするのは機がまだ熟していないと考えている。現在の理論社会学の課題は、実際の研究活動の概念的枠組みに応用できるいくつかの特殊理論を発展させることである。かれはこのような再認識に基づいて中範囲理論を打ちだした。かれの考えによれば、中範囲理論は日常研究にある非常に豊富な小規模であるが必要な作業仮説と、社会的行為、社会組織および社会変動を解釈するすべての観察可能で、かつ全体を包含する体系的な理論との間に介在する理論である。したがって、中範囲理論は検証可能であるだけでなく抽象的でもあり、相互に関連する理論的命題から構成されている。しかし、すべての社会的行為あるいは社会構造を解釈する考えはない。20世紀の80年代に、中国本土の社会学が経験研究面で広く採用したアンケート調査法と統計分析手法は、コロンビア学派のこの方法論的思想の影響を深く受けたあらわれとみなすことができる。

いうまでもなく、シカゴ学派のコミュニティ研究方法論の影響を深く受けた費孝通教授は、統計分析を容易にするために社会調査でのアンケート調査の形式を支持しながら、やはり依然として自らのコミュニティ研究のやり方を堅持した。1982年10月、筆者は費孝通教授と一緒に5回目の江村を訪れた時、費先生にパーソンズの構造=機能主義理論をどう考えるか、と尋ねたことがある。費先生はやや考え込んでから、「わたしはパーソンズが好きではない、パーソンズの理論は森をみて木をみていない、しかし社会学は必ずひとをみななければならない」⁽⁴⁸⁾と答えた。

学問の一つの分科としての社会学の成長は、必ず識別と比較を必要とする、もちろん、このような識別と比較も、相対的に開放的で、穏やかな学術環境を必ず必要とする。幸いにも、20世紀の80年代をとおして、社会学の学術環境は学科の回復と再建に対して有利になった。鄧方の見解によれば、「再建後の中国の社会学は、中米の学術交流から大きな収穫をえた」、「中国の社会学は再建中に迅速な発展を収めた。1988年7月末現在の統計によると、中国はすでに社会学の専任教員、研究者が1,000人余り、社会学会が35団体あり、全国ですでに12の大学が社会学部(専攻)を設けている」、「1986年10月に提出された『第七期五か年計画』期間の全国哲学社会科学計画のなかで、社会学は再び13項目の国家重点課題を受諾した」⁽⁴⁹⁾。

これと同時に、社会学と密接に関係する「ソーシャル・ワーク」（社会工）も学問分科および専攻として復活しはじめた。「文化大革命」の10年間、中国のソーシャル・ワークの発展は休眠期に入った。しかし、社会学の復活はまた以前、ソーシャル・ワークの学術研究に従事した学者にも、学科を回復、再建するという確信を与えた。雷潔瓊教授は1980年の第1回社会学講習班で「ソーシャル・ワーク」の講義を行なったことがある。かのじよは、1981年1月に、民政部の幹部に対して行なった研修でのスピーチのなかで、われわれは将来、ソーシャル・ワーク学部を設置こと、あるいは社会学部のもとにソーシャル・ワーク専攻を設置する可能性があるとはっきりと指摘した。その後、民政部管理幹部学院はかつて社会政策に関連する課程を開設したことがある。1985年12月、当時の国家教育委員会が広州で「社会学専攻教学改革セミナー」を開催し、雷潔瓊らの学者がソーシャル・ワーク専攻の再建を呼びかけた。調査研究と十分な論証を経て、国家教育委員会は社会学の分野のなかに、ソーシャル・ワークと管理専攻を試験的に設置することを決定した。この期間に、中山大学と香港大学が共同でソーシャル・ワークの課程を開いたことや民政部が開催した「馬甸会議」⁽⁵⁰⁾もソーシャル・ワーク教育の発展を促進した。1988年のはじめ、北京大学、吉林大学、中国人民大学の3大学がソーシャル・ワークと管理学科の本科の専攻を試験的に開設する承認をえた。民政部の強い支持のもとで、北京大学は1989年からソーシャル・ワークの学部生を募集し、同時にソーシャル・ワーク分野の修士課程の大学院生を募集した⁽⁵¹⁾。

〔注〕

- (1) 楊心恒、2015、「説説中国社会学的回復與重建」、『炎黄春秋』第1期。
- (2) 高鑑国・孫淑霞、2008、「中国社会学的回復與重建－訪徐経澤教授」、『山東大学学报』（哲学社会科学版）、第4期。
- (3) 「中国社会学研究会第一回理事会会長、副会長、顧問、理事名簿」、1991年、『社会学通訊』第1期。
- (4) 楊心恒、2015、前掲。
- (5) 楊心恒、2015、前掲。
- (6) 費孝通、1999、『費孝通文集』第14卷、北京：群言出版社、p.373。
- (7) この段落は、楊善華の当時の教室でのノート筆記による。
- (8) 鄭杭生、2009、「費孝通先生の中国社会学に対する偉大な貢献－費孝通先生の学術研究70周年を記念して」、馬戎ら編『費孝通と中国社会学人類学』、北京・社会科学文献出版社、pp.227-228。
- (9) 中国社会学研究会は、1982年に中国社会学会と名称を変えた。
- (10) この基礎のうえに、1982年秋、学校の承認を経て、南開大学社会学部が正式に成立した。
- (11) 〔訳者注〕黄埔1期、2期とは、黄埔軍官学校の卒業生のことである。黄埔軍官学校とは、孫文が創立した国民革命軍の士官養成学校であり、卒業生には才能がある人材が多く、のちに国民党軍だけでなく、共産党軍の指揮官となり、中国革命運動に大きな貢献をした者を多く輩出した。とくに1期、2期生は、両党の中核として影響力が大きかったので、ここでは比喩的に講習班の受講生たちが、のちに中国社会学の発展の中核になって行ったことを表現している。
- (12) 蘇駝・劉軍強、2009、「費孝通と南開大学社会学部の創立」、馬戎ら編、前掲、pp.145-146。
- (13) 雷潔瓊教授は生前、この点について王思斌、楊善華になんども言及した。

- (14) このことの重要な原因は「文革」の後期、雷潔瓊教授と嚴景耀教授が「幹校」(五・七幹部学校を指し、文革期の幹部の強制労働収容所：星挿入)から戻ってきた後に、北京大学国際学部での仕事が割り振られたことである。
- (15) 北京大学社会学部、社会学人類学研究所、「再起」、2018 年 10 月 30 日、
<http://www.shehui.pku.edu.cn/second/index.aspx?nodeid=19>。
- (16) 王康、2000、「社会学の人材養成」、李德濱「私と中国社会学 20 年－中国社会学第 1 回講習班の回顧」、瀋陽：瀋陽出版社。
- (17) 李德濱、2000、「歲月忽忽、往事悠悠」(年月はながれ、過去ははるかかなた。意識：早くながれ去った人生のなかで、さまざまな出来事があった)、李德濱編集、同上、p.67。
- (18) 李德濱、同上、p.68。
- (19) 李沛良、2000、「廿載情緣」(20 年のつながり)、李德濱編集、同上、p.8。
- (20) 鄧小平、1993、「四つの基本原則を堅持する」、『鄧小平文選』第 2 卷、北京：人民出版社。
- (21) 王康、2000、前掲、「社会学の人材の養成」を参照されたい。
- (22) 以上の資料は、楊善華が保存している第 2 回社会学講習班教学日程表と講習班のダイジェスト第 1 期から引用した。
- (23) 南開大学の社会学専攻班の学生の回想によれば、P. M. ブラウと林南の課程がもっとも多く、両教授の講義はいずれも少なくとも 20 回はあった。張龍、2016、「社会学『南開班』(1981-1982)」修士学位論文、北京大学社会学部を参照されたい。
- (24) 王輝教授の回想によれば、そのうえ授業を行なった外国籍の教師にはアメリカのスタンフォード大学の社会の近代化を専門的に研究している A. インケルス教授がいたというが、しかし筆者が北京大学社会学部張龍の修士学位論文「社会学『南開班』(1981-1982)」のなかに、南開大学社会学専攻班の当時の学生のノート筆記を復元した課程表によれば、インケルスの授業記録をみいだせなかった。
- (25) 張龍、2016、前掲を参照されたい。
- (26) 李友梅の回想によれば、復旦大学分校(現在の上海大学)は 3 名の非公式な受講者の定員人数を獲得していた。張龍、2016、前掲を参照されたい。
- (27) 楊心恒、2000、「わたしと南開大学社会学専攻」、李德濱編集、前掲書、p.117。
- (28) 費孝通、1984、「まえがき」、『社会学概論』(試行本)、天津：天津人民出版社、pp.2-3。
- (29) 夏学鑾、2000、「わたしはどのように社会学の道を歩んだか」、李德濱編集、前掲書、pp.153-155。
- (30) 費孝通、1984、「まえがき」、前掲書、p.6。
- (31) 費孝通、1996、「学問の氣風をつくり、人材を育てる」、『北京大学学报』(哲学社会科学版)、第 1 期。
- (32) 以上の引用は、費孝通、同上を参照されたい。
- (33) 以上の引用は、費孝通、1981、「積極的に新中国の社会学を創立しよう－5 月 25 日第 2 回社会学講習班始業式のスピーチ」、『社会学通訊』(試刊)、第 1 期を参照されたい。
- (34) 費孝通、同上。
- (35) 張仙橋、2000、「わたしと社会学との 3 回の縁」、李德濱編集、前掲書、p.28。
- (36) 瀋崇麟、2000、「わたしと社会統計学」、李德濱編集、同上、pp.198-199。
- (37) 筆者は、費先生の調査項目を口述筆記した謄写版印刷をいまもっている。
- (38) 吳大声は、「小城镇研究と社会学の創建」のなかでも、費孝通教授が小城镇問題を重視したのは 1981 年冬の「四度目の江村訪問」の時であると思う、と述べている。吳大声、1986、「小城镇研究与社会学の創建」、『江蘇社聯通訊』、第 11 期を参照されたい。
- (39) 『中国社会科学院社会学研究所所誌 (1980-2007)』を参照されたい。
- (40) 鄧方、1989、「中米社会学の 10 年の交流の中国の社会学に対する影響」、『社会学研究』、第 3 期。

- (41) 鄧方, 同上。
- (42) 楊善華, 2005, 「袁方教授と社会学部の対外協力と交流」, 吳宝科・佟新編『袁方紀念文集』, 北京: 北京大学出版社。
- (43) 鄧方, 前掲。
- (44) もと『国外社会学参考資料』, 1986年から『国外社会学』の改名。
- (45) 鄧方, 前掲。
- (46) 鄧方, 同上。
- (47) 鄧方, 同上。
- (48) これは筆者の当時のメモである。
- (49) 鄧方, 前掲。
- (50) 訳者注: 彭秀良によれば, 1987年9月12日-14日に民政部がもと国家教育委員会, もと人事部, もと労働部などの政府部門および社会学とソーシャル・ワークの学者を招請し, 北京で「中国社会工作教育發展論証会」を開催した。この会議の開催場所が北京市の馬甸橋付近の北京対外經濟交流センタービルであったので, 「馬甸會議」と俗称される。この会議は中国の社会福祉事業改革と發展に対する専門的なソーシャル・ワークの必要性を論証し, ソーシャル・ワーク専攻の地位を確認して, 中国のソーシャル・ワークの發展のために政策と組織の準備を行なった。したがって, 専門的なソーシャル・ワークの回復・再建のシンボルとみなされる会議である(彭秀良, 2017, 「三十年后再出發-紀念馬甸會議召開三十周年」, 『中国社会工作』, 2017年31期, 中国社会報社, pp.56-58)。
- (51) 本書(『中国社会学四十年-改革開放四十年與中国社会科学叢書』, 商務印書館, 2019)の第5章王思斌の「社会政策とソーシャル・ワークサービス」を参照されたい。

〔謝辞〕

この翻訳にあたっては, 前佛教大学社会学部教授の張萍先生および元中国社会科学院博士指導教授の張琢先生からご指導や指摘をいただいたし, 城西国際大学の姜寅星先生からも多くの助言をいただいた。記して, 感謝申し上げます。

張琢・張萍教授ご夫妻には, 『中国社会学四十年-改革開放四十年與中国社会科学叢書』(商務印書館, 2019)の編者の張静教授(北京大学社会学系主任)との仲介の労をとっていただき, 翻訳の事前の手続きをスムーズ進めることができたことに, 感謝いたします。

(ほし あきら 元現代社会学科教員)
2020年4月20日受理